大学院教育改革支援プログラム*「学生プロジェクトを支援する数理科学教育」

Newsletter

Vol.6
2009.DEC.

Graduate School of Mathematics
NAGOYA UNIVERSITY
名古屋大学 大学院多元数理科学研究科

最新の研究成果を名古屋から発信

第9回名古屋国際数学コンファレンス
「Harmonic Analysis and Partial Differential Equations」

2001年度より毎年テーマを決めて開催されている名古屋国際数学コンファレンスは当研究科が公式にサポートしている国際研究集会です。
今年度後半の大規模な取組みの一つとして第9回名古屋国際数学コンファレンスが開催され、日本国内の若手研究者はもとより、世界各国から第一線で活躍している研究者たちが闊達な研究発表を行いました。教育研究支援室はコンファレンスをサポートする事務局業務を担いましたが、その中心的役割を果たした松村裕代さんにコンファレンスの模様をレポートしていただきました。

Karlheinz Gröchenig氏の講演の様子

2009年9月28日から10月1日にかけて、多元数理科学研究科において国際数学コンファレンスが開催されました。このコンファレンスは今年で9回目を迎えます。今年は杉本充先生をオーガナイザーの1人とし様々な講演が行われました。メインテーマを「調和解析と偏微分方程式の相互作用」とし、「調和解析」を道具として使っている偏微分方程式の研究者および「偏微分方程式」を意識した調和解析の研究者による最新の研究成果が発表されました。会場となった理一号館509号室では、K.Gröchenig氏による「Time-frequency methods for pseudodifferential calcul」に始まり、最後のM.Ruzhansky氏の「Pseudo-differential operators and symmetries」に至るまで、終始研究者たちの真剣な表情が伺えました。（講演の様子はDVDに録画し支援室にて貸し出しをしています。）

さて、参加者は50名におよび、18名の講演者のうち10名はヨーロッパ・アメリカ・アジアと国際色豊かな顔ぶれとなりました。数学という学問を通じて、研究科内の研究者のみならず学生にとってもこのコンファレンスが国際交流の場となったのではないでしょうか。

講演の合間にはラウンジで談話する参加者たちの姿がありました。

また、今回のコンファレンスでは講演に加え、主に海外からの参加者を対象としてエクスカーションが行われました。随行した支援室スタッフによると、訪問先の1つであった名古屋市博物館の「そろばん展示コーナー」では、どの参加者もとりわけ熱心に見入る姿が目立ち、「数学者」の尽きることのない好奇心を目の当たりにしたひと時だったそうです。

今回教育研究支援室では、6月から杉本先生と打ち合わせを重ね、国内外の講演者招聘手続き、パンフレット作成、そして会場準備等コンファレンスのサポートに尽力いたしました。29日に行われた懇親会会場で、オーガナイザーや参加者の皆様からコンファレンスが充実するものであったとの声を多数いただけたのは何よりの喜びでした。

来年で多元数理科学研究科が開催するこのコンファレンスも10回目を迎えます。来年度は今年度以上に充実したプログラムを皆さんに提供できるよう更なる飛躍を目指したいと思います。（松村 裕代）

ラウンジでの様子

海外講演者のリスト

講演者	所属	講演タイトル
Neal Bez	University of Glasgow	Nonlinear Brascamp--Lieb inequalities via induction-on-scales
Dong Hyun Cho	Kyonggi University	An analogue of operator-valued Feynman integral via conditional Feynman integrals on a function space
Xuan Duong	Macquarie University	Hardy spaces associated to operators satisfying Davies-Gaffney estimates and bounded H∞ functional calculus
Karlheinz Gröchenig	University of Vienna	Time-frequency methods for pseudodifferential calculus
Alexandru Ionescu	University of Wisconsin-Madison	On the regularity of certain spin models in 2+1 dimensions
Camil Muscalu	Cornell University	Flag paraproducts and non-linear PDE
Stevan Pilipović	University of Novi Sad	Wave front sets in Fourier Lebesgue spaces
Luigi Rodino	University of Turin	Global regularity for partial differential operators with polynomial coefficients
Michael Ruzhansky	Imperial College London	Pseudo-differential operators and symmetries
Baoxiang Wang	Peking University	Frequency decomposition techniques for the nonlinear Schrödinger equation

国際コンファレンスでは、当多元数理科学研究科の学生も数名がこのコンファレンスに参加しています。彼らにとってもこのようなコンファレンスは、数学に対する更なる興味を刺激されるきっかけとなるようです。

参加した多元数理科学研究科の学生の声 ▷▷▷

- 自分の専門と近そうな講演数個を聴講してみました。海外の研究者とともに講演を聞く機会はめったにない事なので、よい経験が出来ました。（D2 山路哲史さん）
- この研究集会では、「modulation空間」の話題が豊富であった。この空間に関する研究はまだ日が浅いが、様々な偏微分方程式と相性がよいという性質もあり、幅広い分野の研究者が注目している。その最先端の研究の講演が聴け、有意義な研究集会であった。（D2 加藤孝盛さん）

国際数学コンファレンス開催中、参加者の方からの生の声をぜひお伺いしたいということで、教育研究支援室のスタッフが、何名かの参加者の方にインタビューを行いました。下記の記事は、そのうちのお一人の先生から頂いたメッセージを、ご自身の感想を踏まえ、教育研究支援室のスタッフである飯島愛子さんから報告して頂いたものです。

研究者たちが集うことの意義

私たち事務スタッフはこの国際コンファレンスの準備には毎年多忙を極めます。煩雑な事務に追われて、昨年度は最終日が無事終了した時には、私はひとつの大きな祭りがやっと終わった時のような気分がしておりました。今回は講演者の何人かにお話を伺う機会を持てたことで、プログラム内容、開催場所や雰囲気についての個人的な感想を伺えたのが興味深かったです。国際コンファレンスのような大規模な研究集会には、単に情報交換や最新の研究結果の発表だけではなく、そのゆかりの地の記憶やその時に同席した研究者達との交流も深く印象に残るように感じました。　学問とは、過去の偉大な業績を受け継ぎ、それを現代の研究者の努力によって昇華し、そして未来に引き継がれて発展するものであると思います。この名古屋国際数学コンファレンスも祭りのように、一時の盛り上がりを見せて完結するものではなく、過去の歴史の蓄積や研究者の思い出を引き継いで未来へ継承するものであり、事務スタッフとして携わることの意味の深さを改めて実感しました。

最後に、学習院大学名誉教授で、今回のコンファレンスにご参加くださった黒田成俊先生から頂いたお言葉をご紹介します。

（飯島 愛子）

素晴らしいカンファレンスは新しい発展の礎になるでしょう。
それを願いながら金のしゃちほこを眺めていると、
昔昔に見た、お城の巨大な木組みや、数日前に
名鉄津島線の車窓から見た天守の姿を思い出します。
昔と今をこれからへ。

*文部科学省　http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/daigakuin.htm
日本学術振興会　http://www.jsps.go.jp/j-daigakuin/index.html

昨年までの「大学院教育改革支援プログラム」から、事業の目的や性格等が変更されました。

海外にて数学を楽しむことの意義

～学生プロジェクトメンバーの海外研究交流報告～

学生プロジェクトは今年で4年目になります。当プロジェクトの研究活動の企画にあたっては、海外で開催される研究集会への参加も積極的に勧めています。その数は増加傾向にあり、渡航先もさまざまです。学生にとって研究進展のための糸口を見つける、有意義な研究活動であると共に、大学院生活の中で思い出に残る体験となるでしょう。特に、海外の若手研究者との意見交換により有益な知見を得るという経験は、学生にとって大きな励みとなるようです。今号では、D3松本拓也さんと、D2原田慧さんお二人の海外での研究活動をご紹介します。松本さんに取材を行い、また原田さんからは出張の感想を頂きました。

一歩一歩、前進して行きたい
～初めての欧州研究出張から得たもの～

松本拓也さん　発表したポスターの横で

松本拓也さん（D3）は、今年6月末にイタリアのローマで開催された弦理論の国際会議「Strings 2009」と、ドイツのポツダムで開催された国際会議「Integrability in Gauge and String Theory」に参加した。

海外の研究集会に参加することは、松本さんにとって初めてのことであり、「良い経験をさせて頂いた」と言っている。ローマで行われた弦理論の会議では、著名な研究者の講演が数多く行われた様子だった。松本さんの印象では、正直なところ勉強不足な面もあり、すべての話を正確に理解することはできなかったが、最近の弦理論全体の重要な進展が、その研究者自身によって語られることは、論文を直接読む以上に分かりやすいものだったという。後半のポツダムでの会議ではKonstantin Zarembo先生の講演で、超対称リー群のキリング形式が縮退していることと、その上のシグマ模型の共形不変性との関係を知ることができ、松本さん自身の研究と関係していることもあり、いろいろと想像することができ、興味深かったと語ってくれた。同ポツダムでの会議は、松本さんの研究分野とより近いこともあり、自身もポスター発表などをして、参加者の方といろいろと議論することができた。松本さんのポスター発表の研究題名は、"Serre Relation and Higher Grade Generators of the Ads/CFT Yangian Symmetry"で、以前はメールでしか面識のなかった共同研究者の方で、講演者のお一人でもある、Alessandro Torrielliさんと初めてお会いし、最近の共同研究について、今後の研究の方向や可能性などについて、話をする場を設けることができたことは今回の出張の成果の一つだったと満足しているようだ。いずれの研究集会も、著名な研究者の話を直接聴けたことはもちろんだが、精力的に研究している若い研究者の方々と交流できたことは、松本さんにとって大変良い刺激になったという。ポツダムでの研究集会が行われた最終日には、同都市にあるサンスーシー宮殿を散策しながら、他の若手研究者たちと穏やかな時間を過ごすことができたと言っている。

松本さんは今回の出張をきっかけに、「今の自分にいろいろと不足している点を自覚できたことも事実」と語る。「今後も一足飛びにはいきませんが、一歩ずつ前進していきたいです。」と決意を露にした。

松本さんの未来の研究が大変楽しみである。（取材：辰巳 順子）

“Green Tunisia”にて新しい着想を

原田慧さん（真ん中）　チュニジアの古くからある宮殿の前で

10月12日から17日までチュニジアのHammametで開催された、国際会議"International Conference on Stochastic Analysis and Applications"に参加してきました。この国際会議に参加したきっかけは、中心となっているオーガナイザーの、H.Ouerdiane教授と知り合う機会があって、その時に誘われたことでした。

開催地はアフリカ大陸ですが、Ouerdiane教授の幅広い人脈のおかげでヨーロッパ、アメリカなどの世界各国から高名な数学者がたくさん集まった、とても大規模な会議でした。チュニジアには、"Green Tunisia"という言葉があるらしく、古代ローマ帝国の時代には重要な穀倉地帯だったといいます。またアラブ人というとどこか閉鎖的な印象があったのですが、今回私が出会った人々はみな人懐っこく親切でした。国際会議を開くにはとてもいい環境だと思います。

私にとって、海外は今回が二回目でした。前回はポーランドで開催された国際会議に出席したのですが、その時は緊張のあまり、講演が終わるまで楽しむことができませんでした。しかし今回は二回目ということもあって、国際会議をエンジョイする余裕がありました。若い参加者も多く、彼らと仲良くなり数学の専門分野の話だけでなく、お互いの国の文化や宗教のこと、また若い数学者の現状など、さまざまな会話を楽しんだことは、特に海外ならではの経験だったと感じています。

"A relationship between usual and Exotic Hida-Kubo-Takenaka spaces"というタイトルで講演をしました。講演はとても緊張しましたが、専門の近い方が何名かいらっしゃって、鋭い質問をぶつけてくれたり、おもしろかったと声をかけてくれたり、「（自分の）講演の論文のコピーが欲しい」と言われたりして、講演後の時間がとても有意義でした。こういった活発な雰囲気も海外ならではだと思っています。海外の聴衆は表情が豊かで、聞いているのかいないのかよくわかり、講演してみて自分の話を聞いている人がたくさんいるのが分かったので、話しがいがありました。また海外の研究者は、疑問に思うことがあれば、自分の専門外であっても躊躇なくコメントをしてきます。これは大切なことで、こういうコメントがあるおかげで誰でも発言できる雰囲気ができますし、新しい着想を得るためには専門外の研究者の意見こそ必要なものだと思います。この場で受けたコメントは、今回の結果を論文にまとめる場面で、また次の課題を見つける場面で大変役立つと思います。（原田 慧）

今期の学生プロジェクトメンバーの活動紹介

今回のニュースレターでは、前回に引き続き、学生プロジェクトメンバーの、活動に関する生の声をお伝えします。短期または長期の研究集会への参加は、それぞれ学生の自主的な企画の上に行われています。集会に参加することで、またそれ以外の研究集会の存在について情報が入ったり、研究分野の第一人者の講演を聞くことができたり、得るものが大変多いのも、プロジェクト活動の成果と言えます。

「正標数の可換環における数値的不変量の研究」

D1 松田 一徳　　M2 千葉 隆宏

立教大学で行われた「可換環論サマースクール」に参加
（期間:2009年8月24日～8月27日）

今回で6回目を迎えるこの研究集会は、毎年テーマを変えて行われるのですが、今回は「Frobenius splitting」がテーマであり、学生プロジェクトの研究テーマと非常に近いものでした。松田・千葉両名とも今回が初参加でした。発表はしていませんが、全国にいる正標数の可換環論および代数幾何を専門とする若手研究者の講演を聞けたこと、特に若手No.1といわれる九州大学の高木俊輔氏の講演を聴けたことは非常に有益でした。

また、自分達と同分野のたくさんの研究者と会うことができ、皆さんが現在何を研究されているかを知ることができたのもよかったです。

今回学んだことを活かし、松田は論文、千葉は修士論文に力を注いで行きたいと思います。

「Hecke代数の表現論の拡がり」

D3 沖中 智史

稚内北星学園大学で開かれた組合せ論サマースクールに参加
（期間:2009年8月31日～9月3日）

参加者は誰もが発表を行うというルールの下で、自分も現在計算に苦心中の事柄について発表を行いました。丁寧な説明を心掛けましたが、制限時間を失念していて悔いが残りました。現在研究で苦労している計算内容は、「B-M-W代数のcanonical basesの具体的な表示」の計算です。

代数のサイズが大きくなると、計算では手に負えず、できればcanonical basesが決まる具体的なアルゴリズムを知りたいと思っています。

参加された方達は、皆さんしっかりとした発表を行っていました。他にも興味深い入門講義を聞くことができ、休憩時間には人間関係やキャリアパスに関する情報、別の地域や研究室での様子が聞けて新鮮でした。またこのサマースクールに参加することで、秋に沖縄県宜野湾市で表現論シンポジウムが開催されるという情報を得ました。

「多元環の表現と代数幾何」

D1 山浦 浩太

港区の邦和セミナープラザにて研究合宿を企画、開催
（期間:2009年9月23日～9月26日）

学生プロジェクト「多元環の表現と代数幾何」では、名古屋市港区にある邦和セミナープラザにおいて合宿形式のセミナーを行った。

参加者はプロジェクトの構成員であるD1山浦、D2関谷、M2林に加え、多元環の分野からM1水野、代数幾何の分野からD1斉藤が参加した。さらに、名古屋大学以外からは、首都大学東京の多元環と代数幾何の関係に詳しいD1小迫氏とD2佐藤氏を招聘した。今回、合宿形式でセミナーを行った狙いは、セミナー以外の時間も共に生活することにより、質問や議論などを行いやすくし、通常のセミナーのみでは得られない知識や、計算技術を得ることであった。実際に、合宿中は互いに研究内容に興味を持ち、分からないところを積極的に質問したり、新たな問題を提起したりと、活発に数学を行うことができ、とても有意義なものになったと満足している。

“学ぶ意欲”は国や研究科の枠を超えて

当多元数理科学研究科の庄司研究科長をはじめとして、多元の教員と学生が、11月13日に、名古屋大学上海事務所にて、留学生を募集するための説明会を開催しました。産業面でも成長の著しい中国から、意欲あふれる大学院留学生を積極的に受け入れようという希望を持って開催するものです。また10月から始まった博士後期課程への入進学相談会も、合計4回開催のうち、3回目まで無事終了しました。多元数理科学研究科以外の方からも申し込みがしやすいように工夫をして、多元以外の学生の方にも垣根を感じさせない研究科を目指しています。

上海にて多元数理への進学をアピール

上海の歴史の香りを残す旧フランス租界の一角、徐家匯（Xujiahui）にある名古屋大学上海事務所で、11月13日に中国からの留学生を募集するための説明会が開催されました。この説明会は、中国政府の「2010年度国家建設高水平大学公派研究生項目」による後期博士課程への留学生の受け入れと、2011年度から開始される日本政府の「国際化に向けた拠点大学建設計画（Global30）」による留学生の受け入れに対する説明をかねて、多元数理科学研究科が中国からの大学院留学生を積極的に受け入れる方針であることをアピールするために、今年度初めて企画されたものです。説明会は午前10:00-12:00と午後14:00-16:00の2回に分けて行われ、午前の部には南京大学の学生3名と指導の先生、午後の部には上海にある同済大学の学生1名と華東師範大学の学生2名、合計で6人の学生（男3名、女3名）と、教員1名が参加してくれました。また名古屋からは教員6名と、大学院生の和田君、昨年度の公派研究生項目で来日している留学生の王さんが参加しました。説明会では前半に多元数理科学研究科の紹介と留学生受け入れに対する説明を行い、後半は中国の参加者を囲んで懇談を行いました。王さんや和田君が体験に基づいた名古屋の魅力を語り、王さんが適宜中国語で補足してくれる中で、懇談はなごやかな雰囲気のうちに進みました。また中国における修士から博士への飛び級の問題や、私費留学における種々の問題など、つっこんだ議論もなされました。どの参加者も日本への留学に対する熱意にあふれており、初めての試みとして十分な手応えの感じられた説明会でした。

留学生説明会の様子

（取材：濱 亮介）

多元以外の方も参加できます！　後期課程入進学相談会

あと1回 1/23

個別相談の様子

博士課程（後期）の内容を多くの皆さんにお知らせすることを目的として10月から1月まで毎月1回土曜日の午後に相談会を開催しています。後期課程の教育研究などについての質問や相談にお答えし、修士論文や研究内容、また学習方法などについて個別にアドバイスを行っています。多元以外の方も対象にWebからの事前登録を受け付け、志望する教員との面接ができるように努力しています。もちろん、当日の飛び込みでの参加も、修士1年生の参加もOK。初回は多元修士4名が参加し、30分ほどの説明の後、懇談の時間では奨学金や就職のことなど非常に多くの質問にお答えしました。2回目の11/21には多元以外の方からの申し込みもあり、今後、より一層後期課程進学の疑問にお答えできるように内容を充実させていく予定です。ぜひwebチェックしてみてください！

http://www.math.nagoya-u.ac.jp/ja/admission/2010/dc-meeting.html

（取材：森川 綾）

学習の現場から　～少人数クラスを訪問しました～

ロード・オブ・ザ・可換環

多元数理科学研究科では、研究科の教育理念実現のため教育環境の整備・改善を常に重要な課題として取り組んでいます。そのひとつ「少人数クラス」について、制度の変更点、学生からの意見等についてNewsletterでもお知らせしてきました。今回は実際に少人数クラスを訪問し、その生の様子をお伝えいたします。

少人数クラスの授業の様子　（右）吉田准教授

今回、取材を行った吉田准教授クラスは、4名のM1を中心にM2が1名、博士1名の計6名が参加する中規模のクラス。M1の出身大学も前年度の研究内容もバラバラであるが、同じ可換環論の道を志して、代数幾何学の入門書を輪読し、毎週1～2名の学生がそれぞれ1時間半程度の発表を行っている。吉田先生によると、学生のレベルが比較的均衡しているためゼミ形式（※）のスタイルをとり、必要に応じて教員による講義や修士論文のための個人指導を行うこともあるとのこと。可換環論は抽象的な学問である。この道に進むためには抽象的な議論をマスターする必要があるが、具体的なイメージを膨らませることも必要である。

そのため、このクラスでは、代数幾何学の入門書を通じて出来るだけ多くの具体例に触れることを目的としている。このことは、M1が進級し少人数クラスを決める際の選択肢が多くなるように配慮することも含まれているようである。現在のクラスは、11月までで基礎のトレーニングは終了し12月に入ってからは専門的な内容に入る見込みである。基礎トレーニングの段階では、吉田先生が激しく突っ込む場面もあったが、絶妙なタイミングでM2や博士が助け船を出すシーンも見られたそうである。実際の現場を見ると、学生が自主的に突っ込みそうな活発なクラスだという印象を受ける。

このクラス唯一のM2である鳴海純さんは現在、組合せ論についての研究を行っている。修論を書きつつ積極的にM1のみんなの発表をフォローしている。「研究の中で分からない事があると先生がヒントをくれる、それでも悩んでしまう場合は鳴海さんが助け舟を出してくれて解法へ道を示してくれる」と、森田啓さん（M1）。真剣な中にも和気あいあいとした空気が感じられるクラスである。　（片田 栄里）

（※）多元数理科学研究科の少人数クラスは大きく2つのスタイルに分かれる。1つは教員が講義を行う"講義形式"であり、本研究科の特色でもある。もう1つは学生が黒板で発表する、いわゆる"ゼミ形式"、これはクラシカルなタイプである。

STAの取組み
キャリアパスの充実に向かって

今年度から新しく始めた、バリアフリーな取り組みとして、学年を問わず学生が参加できる「博士課程オリエンテーションセミナー」があります。この様子をレポートして頂きました。

オリエンテーションセミナーの様子　（左）D2 原田慧さん　（右）D1 杉山倫さん

10月からSTAに採用された、原田慧さん（D2）、杉山倫さん（D1）によるキャリアパス形成を目的とした活動を紹介。2人が行なう『博士課程オリエンテーションセミナー』は、10月末～1月末まで毎週1回開催。内容や進行方法はSTAにより決められる。お茶やお菓子を用意したバリアフリーなセミナーで学年を問わず参加できるのが特徴。

過去問題の解説を約90分、その後に修士論文やプレゼンの方法など、様々な質問について個別相談を受付ける。解説はついていけるか心配…という学生はこの時間からの参加も可能。取材日のテーマは「固有値と固有空間」、学部3年～前期課程2年の11名が参加。

「進学を目指す学生のサポートはもちろん、"入試問題は難しくて解けないかも"と悩んでいる学生の不安を取り払いたい。そして多元数理への進学者が増えたら嬉しい。この場を使って'たての交流'をより充実させたい。」と、2人が同じ目的意識をもって活動している。

今回の取組みについてSTAとして

原田さん：「今回は前期の活動とは異なり、大まかな目的のみを与えられ具体的な企画の立案、実際の運営は自分達の裁量に任されている。戸惑う部分もあるが、大きなやりがいを感じている」

杉山さん：「教えるためには、自分自身が内容を理解していることだけでなく、どこが難しくどこにポイントがあるかを探し出すことが重要であると感じた」

参加者の感想

学部3年生：「進学予定であっても、なかなか自発的に入試の準備ができないのできっかけができた。ここでは自分の持っている知識の使い方を教えてもらうことができる。」

前期課程1年：「博士後期課程に行くかどうか悩んでいて、相談をしたいと思い参加した。STAと話せることに加え、同じドクターを目指す仲間との交流が出来るところが魅力」　（片田 栄里）

多元数理科学研究科より

縦にも横にもつながりを広げて

多元数理科学研究科では、就職を志す学生、進学を志す学生を対象とした取組み、また卒業・修了生、在学生とそのご家族や地域の方々等との交流を目的とした行事など、多角的な取組みを展開しています。2009年後半の取組みを紹介します。

◉就職・進学説明会

主に数理学科3年、前期課程1年を対象として進路決定の参考とするための講演、体験談などを実施

◉数理学科説明会

理学部1年生を対象に2年進級時の学科分属に先立ち、数理学科への理解を深めるための講演会、教員と直接触れ合う懇親会を企画

◉企業セミナー・ミニ同窓会

学生の就職活動を支援するため、研究科主催の企業研究セミナーを開催し、卒業生有志から後輩に対して多くの激励を仰ぐ

◉ホームカミングデイ

保護者に対する教務相談および、卒業・修了生、在学生とそのご家族や地域の方々を対象とした講演「数学を研究するってどういうこと?」を企画

HCDでの講演の様子

◉秋の公開講座

数学とその応用に興味を持つ一般社会人、高校生および高校教員を対象とした公開講座を開講

昭和46年3月数学科卒業生が集う!

「around 還暦同窓会」2009年11月29日(日) 名古屋マリオットアソシアホテル

昭和46年6月の理学部数学科卒業生による「around 還暦同窓会」が開催されました。25名の卒業生が集い、還暦を迎えてそれぞれが新たな歩みを始めた様子が交換されました。詳しい報告は来春の理学部同窓会報をご覧ください。
(数理科学同窓会事務局)

同窓会にて

入試情報

名古屋大学大学院 多元数理科学研究科

大学院前期課程(第2次募集)

入学試験 | 合格発表
2010年2月9日(火)

大学院後期課程(冬期募集)

入学試験 | 合格発表
2010年2月10日(水)

◎願書受付期間　2010年1月5日(火)～1月19日(火)

◎後期課程入進学相談会

第4回　**2010年1月23日(土)**
2010年1月19日事前登録締切

名古屋大学大学院多元数理科学研究科では博士課程(後期課程)

冬期募集に先立ち、当研究科後期課程への入進学希望者(修士1年次の学生の参加も歓迎します)を対象に相談会を開催しています。

詳細は以下のURLをご覧ください。
http://www.math.nagoya-u.ac.jp/ja/admission/

教育支援室より

すっかり寒くなり、2009年度も終わりに近づいてきました。1年を通してひそかに研究科に生息する虫の観察を楽しんでいるわたしですが、最近はどの虫も冬眠中のようで、研究科の外はひっそりとしています。

さて、支援室では最近「年度末」や「卒業」という言葉が出るようになりました。学部4年生及びM2の方には進路状況報告の提出もお願いしています(出していただけましたか?!)。進学説明会や就職説明会など、行事も学生の皆さんにとって「次のステップ」を意味するものが増えて来たように思います。

進路状況報告書を支援室に持っていらっしゃる方の表情は十人十色です。晴れ晴れとした顔もあれば、こころなし曇った顔もあり、中には冗談めいて「もうだめだ!」なんて言う人もいます。皆それぞれの思いを抱えがんばっているのだろうな、とカウンターから遠く離れた席でいつもみなさんの声に耳をそばだてています。

ところで、支援室では講義の合間や打ち合わせ後に談話をする先生たちの姿がよく見られます。お話を聞いていると実に話題が豊富なことに驚かされます。自身の研究に対してだけでなく、先生たちは好奇心旺盛で、探究心も人一倍です。この好奇心と探究心が研究者の原点なのでしょうか。ほんの少しの「疑問」が「こだわり」という名の探究心により先生たちの会話はどんどん広がっていきます。お話に耳を傾けつつ、わたしもこの2つを大切にしたいなと思います。そして不況の昨今就職が優先されがちですが、自分を見つめるために皆さんにも好奇心と探究心を持ち続けてほしいと思います。

今年も支援室では研究科のみなさんのサポートのため、スタッフ一同邁進して参ります。みなさんにとって「いつでも立ち寄れる支援室」であるようドアはいつでも開いています。明るい顔でも暗い顔でも大歓迎です。今年もそんな皆に開かれた支援室であれ、と願っています。
(松村 裕代)

編集後記

年の瀬も押しせまり、今年最後のNewsletterを皆様にお届けすることになりました。私にとっては二回目の編集作業で、まだまだ慣れないことも多いのですが、無事発行することができてほっとしております。Vol.6に関する感想やご希望など、皆様のご意見をぜひお寄せください。

今号でも、取材に協力して頂いた全ての方に感謝しますと共に、来年も引き続き、皆様に喜んで読んで頂けるようなNewsletterを作成して参りたいと思っております。

名古屋大学 大学院多元数理科学研究科
〒464-8602 名古屋市千種区不老町
TEL(052)789-2833　FAX(052)789-5397

企画編集 教育研究支援室
「学生プロジェクトを支援する数理科学教育プログラム」ウェブページ
http://www.math.nagoya-u.ac.jp/gp/